No.330

生研リーフレット

2005年6月1日



砂礫材料用大型平面ひずみ圧縮試験装置

Large-scale plane strain compression test apparatus for coarse-grained soils

東京太学生産技術研究所

古関研究室

よく締め固まった礫質土などの硬質地盤に重要構造物を建設する場合、その施工にあたっては特に地 盤の変形問題が重要視され、地盤材料の正確な変形強度特性を知る必要がある。そこで、礫などの粗粒

土を対象として、微小ひずみから大ひずみ領域までの変形強度挙動を解明す るために、大型平面ひずみ圧縮試験装置を作製した。特に中間主ひずみ方向 への水平変位を抑える拘束板の片側を透明にして、せん断層形成の様子など を直接観察できるようにした。またペデスタルと三軸セル底盤の間にベアリ ングを設置して、せん断層発生後の水平変位を拘束しないようにするなどの 工夫をした。

試験装置の概要:全体のシステムとしては、大型三主応力制御三軸試験シス テム(生研リーフレット No.316)を用いて、そのセル内に新たに作製した 大型平面ひずみ圧縮試験装置を設置した(写真1)。

試験装置の詳細を図2に示す。中間主ひずみ ε₂ 方向への水平変位を抑え る拘束板の片側はせん断層形成の様子などを直接観察できるように厚さ 30mm のアクリル製とし、さらに厚さ 60mm のステンレス製の枠で補強し 写真 1 て最大 1 MPa の中間主応力に耐える構造にした。このせん断層観察側拘束

板と相対する拘束板は、高さ方向に三分割し、それぞ れに中間主応力測定用ロードセル(容量 60kN)を取 付けて上下端面の影響の少ない中央部の中間主応力を 測定できるようにした。また供試体の σ_2 面の摩擦を Dow 高真空シリコングリースで低減し、その摩擦力 を拘束板下部のロードセル(容量 10kN)で確認でき るようにした。さらにこれら両側拘束板下部はロー ラーベアリングによって支持し、拘束板に直交する方 向、すなわち供試体の中間主ひずみ ε_2 方向への拘束 板と供試体の一定的な変位を拘束しないようにした。

供試体についてもせん断層発生後の最小主ひずみ (圧縮方向を正とする) ε_3 方向への水平変位を拘束し ないために、ペデスタルと三軸セル底盤の間にロー



!真 1 大型平面ひずみ圧縮試験装置



図1 試験装置の詳細図

生研リーフレット

2005年6月1日

No.330

ラーベアリング(直径 5 mm、 長さ 40mm のローラーを 20 個配置したものを 3 列)を設置 して最大軸荷重 300kN の下で のペデスタルの動きを自由にし た。また、供試体の作製時の締固 め等による衝撃をローラーベア リングで受け持たないように、 必要に応じてペデスタルスライ ド板と三軸セル底盤固定板を直 写真 2 接密着固定できるようにした。



 2 供試体側面の 変形状況の例

大型平面ひずみ供試体は断面 220 × 250mm、高さ 500mm の直方体で、3方向の局所主ひずみは、供試体側 面において軸ひずみと ε_2 方向の水平ひずみをそれぞれ 上中下3箇所において12個のLDT(生研リーフレット No.189)で測定し、 ε_3 方向の水平ひずみは二つの高さ にセットした二対のカンチレバー型変位計で測定した。 実験結果例:平均粒径11mmの礫質土を突固めて作成 した供試体 (ρ_d =1.95g/cm³)を用いて拘束圧78kPa で平面ひずみ圧縮試験を行った結果を図2に示す。この例に示 すようにピーク強度発揮時以降にペデスタルの変位dが大き くなり、せん断層発生後の ε_3 方向への水平変位が拘束されて いない状況が分かる。

上記と同様の供試体で載荷の途中に軸差振幅約400kPaで 100回の繰返し載荷を行った結果を図3に示す。この試験に おいてメンブレン上に5mm グリッドとして設置した標点(写 真2)をデジタルカメラに記録し、標点の変位を画像解析で求 め、局所的な最大せん断ひずみ rmax の分布を算定した例を図 4に示す。この例のピーク強度後の段階(図3、4中の番号 45)では平均軸ひずみ3%程度が生じ、同時に15%以上の rmax が局所的に生じており、すでに明確なせん断層が進行的 に形成されつつあることが分かる。

新たに開発した大型平面ひずみ圧縮試験装置を用いることに より、礫質土などの硬質地盤材料の平面ひずみ条件下での変形 強度特性を精度良く測定することが可能となった。

【執筆担当 佐藤剛司・Maqbool Sajjad・堤 千花・古関潤一】





図4 局所ひずみ分布の算定例

砂礫材料用大型平面ひずみ圧縮試験装置